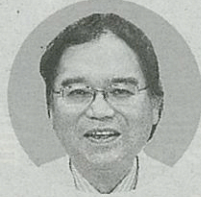


ニッポン 病院の力 実力



10〜30代の比較的若い世代を襲う難病に、「潰瘍性大腸炎」と「クローン病」がある。

潰瘍性大腸炎は、大腸の粘膜に潰瘍などが生じ、症状が悪くなる(再燃)と良くなる(寛解)経過を繰り返し、大腸組織を破壊していく。クローン病は大腸だけでなく小腸にも炎症を起こすのが特徴だ。いずれも免疫機能の過剰反応が炎症に関わることがわかっているが、原因は不明で長年症状に苦しめられる人たちは多い。

そんな潰瘍性大腸炎とクローン病の診断、治療、最先端の研究で、国内をけん引しているのが東京医科歯科大学医学部附属病院消化器内科だ。同科の渡辺

東京医科歯科大学医学部附属病院

難病の「潰瘍性大腸炎」「クローン病」センター開設で専門性の高い医療を提供



守教授(59)「顔写真」は、厚労省の「難治性炎症性腸管障害に関する調査研究班」の班長で、今年3月には、体外で1個の幹細胞を増やして体内に戻すことで、傷ついた大腸の再生にマウスの実験で成功させるなど、世界のトップランナーでもある。

今年4月には同病院に「潰瘍性大腸炎・クローン病先端治療センター」が開設された。渡辺教授(59)「顔写真」は、厚労省の「難治性炎症性腸管障害に関する調査研究班」の班長で、今年3月には、体外で1個の幹細胞を増やして体内に戻すことで、傷ついた大腸の再生にマウスの実験で成功させるなど、世界のトップランナーでもある。

今年4月には同病院に「潰瘍性大腸炎・クローン病先端治療センター」が開設された。渡辺教授(59)「顔写真」は、厚労省の「難治性炎症性腸管障害に関する調査研究班」の班長で、今年3月には、体外で1個の幹細胞を増やして体内に戻すことで、傷ついた大腸の再生にマウスの実験で成功させるなど、世界のトップランナーでもある。

今年4月には同病院に「潰瘍性大腸炎・クローン病先端治療センター」が開設された。渡辺教授(59)「顔写真」は、厚労省の「難治性炎症性腸管障害に関する調査研究班」の班長で、今年3月には、体外で1個の幹細胞を増やして体内に戻すことで、傷ついた大腸の再生にマウスの実験で成功させるなど、世界のトップランナーでもある。

潰瘍性大腸炎やクローン病は、薬や栄養指導などで炎症が治まっても、しばらくすると再び炎症が起こりやすい。それを防ぐには、詳細な腸の診断は不可欠。しかし、内視鏡の検査を何回も受けるのは患者も大変。そこで渡辺教授は、MRIエンテログラフィ(MREC)という新たな診断法を約4年前に開発した。腸の内視鏡検査の前には、腸管洗浄剤を服用するのだが、この状態でMRI検査を患者が受けると、立体的に腸管が

「患者さんは症状が良くなったと感じても、腸管の炎症は継続されていることがあるのです。自覚症状だけではなく、実際の炎症の状態を治療方針を変えることが大切。そのためにMRECは役立っています」

そう話す一方、同病院に同時に開設された「膠原病・リウマチ先端治療センター」との情報交換などを密に行い、新たな治療法への道も切り開いている。

「縦割りの体制がなくなったことで、今後さらに診断や治療に弾みがつくと思います」。その取り組みは、今も続いている。(安達純子)

<データ>2012年4月~7月実績

- ・消化器内科受診患者総数 約1万500人 (潰瘍性大腸炎・クローン病治療センター新規患者数60人)
- ・潰瘍性大腸炎患者数約500人
- ・クローン病約200人
- ・病院病床数800床

〔住所〕〒113-8519 東京都文京区湯島1の5の45 ☎03・3813・6111